

Title	ラーニングコモンズに関する一考察
Author(s)	鈴木, 幸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 8-9
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4977
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ラーニングコモンズに関する一考察

鈴木 幸

はじめに

「アクティブラーニング」という言葉を、2012年に中央教育審議会が「能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法」としてその重要性を指摘してから、それを耳にする機会が増えてきている。その「アクティブラーニング」を実践する場としての「ラーニングコモンズ（以下、LCとする）」を設置する大学も、徐々に増えてきている。本学においても2013年4月より図書館外の一教室にLCが設置され、また2014年1月には図書館内の閲覧室が「アクティブラーニング・スペース」へと改装された。

筆者は、2013年度に入り「アクティブラーニング」に関する研究会等に何度か参加させていただく機会を得た。2013年11月5日には跡見学園女子大学図書館企画のSALA (Saitama Academic Library Association) 研修会Open Library Weeks 2013「図書館の学修支援体制（ラーニング・コモンズ）」に参加させていただいた。そこでは、ホスト校と聖学院大学、そして埼玉県内の他7大学の図書館員が集まり、各大学におけるLCの現状を報告しあった。

ラーニングコモンズの現状

参加した9大学のうち、LCを持つ大学は7校だったが³⁾、現状でLCを持たない2校も将来的に設置することを検討していると答えた。本学以外でLCを持つ他の6大学は、図書館内にアクティブラーニングのための空間を持っていると答えた²⁾。図書館内にLCがある利点は、文献をただちに参照できることである。しかし図書館内外の差は、大きな問題ではないという考えで一致した。むしろ、LCが「学習のための協働空間」³⁾であること、すなわち、ディスカッションやプレゼンテーション等を取り込んだ能動的な学修であるアクティブラー

ニングを行なう空間であると考えれば、「静寂さ」を重視する図書館内にそれを設けることは難しいという問題点が浮かび上がった。

場所の問題に加えて、LC内で人的支援を受けられるかどうか重要なのではないかという点が話し合われた。LCを持つ大学の運営方法は3通りであった。①図書館員が職務の一環として対応している大学、②ポスドクや学生アドバイザーが常時対応している大学、③LCとしての場だけを提供していて人的支援は受けられない大学、である。図書館内にLCを設置している大学でのサポート内容は、主に蔵書検索の補助であった。また、「アクティブラーニング」という観点からすると、単純なレファレンスサービスのみではなく、学修相談や、パソコン操作、レポート・論文執筆の支援までもが求められていることが挙げられた。これらサポートの一部をすでに実施している大学もあり、その実践例が報告された。しかし、どの大学もLCの設置から日が浅く、依然として組織立ったサポートは行なわれてはいないようであった。

ラーニングコモンズのあり方

ところで、「あいている部屋」に設置される傾向があるといわれるLCだが⁴⁾、工夫次第ではどのような部屋にすることもできるだろう。では、学生が能動的に学びたいようなLCとはどのような空間か。マクマランが挙げるLCの構成要素は、以下の9点である。すなわち、①computer workstations clusters、②a service desk、③collaborative learning spaces、④presentation support centres、⑤instructional technology centres for faculty development、⑥electronic classrooms、⑦writing centres and other academic support units、⑧spaces for meeting, seminars, reception, programmes and cultural events、⑨cafes and lounge areas⁵⁾、である。さらに河西によると、こ

れらLCの要素にそれぞれ特徴的な概念は、次の3通りに分類できるという。1)「図書館メディアを活用した自律的な学習の支援」に分類されるのが①②④⑤、2)「情報リテラシー教育とアカデミックスキルの育成」に分類されるのが①②④⑥⑦、そして3)「協同的な学びの促進」に分類されるのが③⑧⑨⁶⁾、である。マクマランと河西は共に図書館内のLCを想定しているため、紙媒体の資料から電子資料までを含む図書館内で管理するすべての資料を活用することが念頭に置かれている。そして、学生がそれら資料を探し出すことから始めて、有効活用する術を学び、プレゼン等で発信することができるようになるためには、場所としてのLCやメディア機器に加え、サポートするスタッフが欠かせないことが強調されている⁷⁾。

SALA研修会においても、前述のようにすでに人的支援が行われている例が報告された。しかし、器となるLCが用意された後には、さまざまな支援を行なうスタッフの確保と育成こそが不可欠であり、今後の課題であることが確認された。

おわりに

LCは、学生の能動的学修を実践させるための空間である。その空間には資料や機器に加え、スタッフを備えることが求められている。SALA研修会で出された意見でもあるが、学生は学ぶ空間としての場を求めると同時に、常にサポートしてくれる人材をも求めるという。すなわち、あの人がいるからあの場所に行きたい、ということである。LCに置いていただいている者として、支援できる技術を身につけるだけではいけないということを痛感した一時であった。

たため、図書館外の一部屋として報告した。図書館内は2014年1月から開設。

3) 河西由美子「Part. 4 自律と協同の学びを支える図書館」『学びの空間が大学を変える』山内祐平編、ポイックス、2010年、p. 103。

4) 小川洋「解説：学習支援センター」『大学における学習支援への挑戦』ナカニシヤ出版、2012年、p. 224。

5) S. McMullen, "US Academic Libraries: Today's Learning Commons Model", OECD, 2008, p. 2. <http://www.oecd.org/education/innovation-education/centreforefactivelearningenvironmentscele/40051347.pdf>

6) 河西、前掲書、pp. 107-8。

7) 同上、p. 108。

(すずき・みゆき 聖学院大学基礎総合教育部ポストドクター)

1) 「ラーニングコモンズ」という名称にかぎらず、「アクティブラーニング」を行なう空間の有無が問われた。

2) 研修会に参加した2013年11月当時は、本校の図書館内にアクティブラーニング・スペースは設置されていなかった